

10/21 (木)

2010年(平成22年)

新潟日報

発行所 新潟日報社
本社 〒950-1189 新潟市西区善久772-2
第24383号

題字 會津 八一

自分は本当に「人との縁」に恵まれていると感じます。新潟へやってきて、この地で豊かな自然に囲まれて仕事ができるのは、私たちを応援してくれる人たちが、いつも支えてくれるからです。

独立して障がい者スキースクールの活動を始めようとしたころ、一緒にやらないかと声を掛けてくれたのは、現在のホームグレンデのスキースクール校長。たくさんある障がい者スキー専用器具を置く場所ができ、ゲストにも安心して来てもらえるようになりま

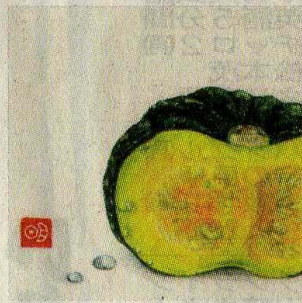


した。
春になって雪が解け、グリーンシーズンの仕事をどうしようかと困っていたとき、キャンプ場に建つレストランのオーナーから、

アウトドアプログラムを担当しないかと誘いをもらいました。このキャンプ場が現在、夏のホームフィールドになっています。YOC湯沢アウトドアセンターはこの話がなければ誕生しませんでした。同じころ、応援してくれている友人が役場の担当者を紹介してくれました。自分たちの活動を知ってもらうことができ、春のウォーキング大会の開催や、冬の障がい者スキースクールの団体受け入れの際などに、広報を含めさまざまな面で行政の協力もいただけるようになり

人との縁

ました。
そして、四季を通して湯沢へやってきてくれるたくさんのお客様は、この地の魅力を私に再発見させてくれます。私たちの活動を必要としてくれているアダプティブ(障がい者)のゲストは、私の考えや視点を育ててくれ、同時に「まだまだ勉強し、成長しないと」と気付かせてくれます。



私が会社をやめて独立するとき、友人が言ってくれました。「企業という看板

が外れたら誰も守ってくれない。自分を応援してくれる人たちを大事にしろ。人との付き合いを面倒と怠ったら自分はなくなる」と。

また、別の友人は「前を向いて進む姿は必ず誰かが見ているから」と言ってくれました。

人とかかわりを「面倒」だと嫌う若者が増えています。でも、その「面倒」が、自分を救うときもあるとわかってほしいと思うのです。

稲治 大介 (NPO法人理事長・湯沢町)